

「ワル」研究序説

——現代の美学と実学——

城 達 也

(ウィズ：中塚美有・徳網菜桜・岡本唯那・荒川亜門・谷崎 樹)

0. 無垢な秩序に隠れる「アフター・ワールド」

すべてが似ている、そんな町の風景や人の行動。いまの社会でどこでも見られる集団秩序。その中心にいて人々に「理想」を示すのが「英雄」であり、「正義」の体現者である。いまや英雄はたんに既成秩序・エスタブリッシュメントの守神に成り下がった。いや、戦争プロパガンダの時代から、そこに描かれた「英雄」とはそういうものだった。

「英雄」に現れた理想や正義と、彼が徹底して撃退する「悪」との勧善懲悪。いまの世の中にはその二種類の人間しかいない。この二分法は人の行動に対する評価だけでなく、町の風景にも現れる。全国どこでも同じ風景の「良い町」と、荒廃した「悪い町」。

しかし、こうした二元論に回収されない美学がいま、求められている。たしかにその反社会的な姿勢は、多数派の社会規範を傷つけて、社会的感情を刺激するだろう。しかしたんに人々の「集合的沸騰」を引き起こして排斥されるだけではない。同時に人々を惹きつける何かがある。「善」か「悪」かの二元論では切れない。もちろん「馬鹿」や「道化」でもない。郊外のニュータウンの無垢な風景でもなければ、ゴーストタウンと化した廃墟でもない。「荒廃」した風景の中にも私たちの生活の基盤となる何かしらの意義があるのだ。

「似たもの同士」になれ、という美的圧力は、いまや教室の中、会社組織の中、そしてネットの中まで広がっている。人は好んでサイバーカスケードをつくる。そしてコンピューターのプロトコルはそうした人々の嗜好に合わせて構築されている。まさしく「多様性の中の同一性」「ダイバーシティを偽装する内向きの空間」。私たちの日常世界が均質化されて、「理想」となる秩序を体現してしまっている。

けども、バグを解消しながらきれいに構築されたマトリックスは、じつは鋼鉄の小舟で宇宙をさまよい、時計仕掛けのタコの怪物に襲われる荒廃した現実の一部でしかない。映画『マトリックス』（ラリー&アンディ・ウォシャウスキー監督、1999年）で提示された世界のように、現代の人間たちは、怪物に培養されて生存しているのに、夢の中の美的秩序に安住する存在である。孵化機から一歩でも外に出れば、人工的に保証された「個性の尊重」や「多様性」は、じつは荒廃した「アフター・ワールド」に浮かぶ小舟の中での人工物に過ぎないことに初めて気づくのだ。

すでにそのことを薄々感じているからこそ、人々は社会の秩序と規範に則して、その無

垢な「世界」を必死で維持しようとする。「日常」を「理想」で埋め尽くそうとする。その中で同調を強いられながらも美しく生きようとする。精密なガラス細工の如くの社会の中にうまく入り込むしかない。もしその同質的な社会からはみ出してしまえば、もはや生存の余地はない。アベンジャー型犯罪の起こる地盤。「社会」という存在にキレて、自爆テロのように復讐を遂げて死んでいく。それも無垢な「世界」のほんの小さな出来事で終わる。

いまの日本社会のどこでもまったく似通った同質の風景のなかに、私たちは日本の秩序を感じる。休日になると全国一律に造られたショッピングセンターには買い物や食事をする家族で溢れかえっている。その家族連れの様子はまさに善意であり、子供達の純情を育ててやがて正義の勇者へと育てようとする。無垢な世界で育った子供の純情ほど、しかしガラス細工のようにすぐに壊れて秩序への自爆的破壊者になっていくものはない。

現代の「子供」を取り囲むものが無垢な世界であるならば、これまた彼らが「冒険」に出る場所はメディアを通じた「ヴァーチャル」な世界しかない。あるいは都心から離れた海岸に人工的に造られた「USJ」の夢の国である。そこでは自己はどんどんと強くなり、増強され、周りの秩序の中に広がっていく。ほどよい刺激と「冒険体験」。うまくいかなければ再起動すればよい。失敗になんの痛みは伴わない。

こうした娯楽にまで覆い尽くす社会装置によって、我々の「アフター・ワールド」はひた隠しにされる。無垢な美的秩序は現実には存在しないイメージだけの「シミュラクル」(J・ボードリヤール)である。美的に作られているがゆえの「機能的・実用的秩序」が広がる。はたして、私たちにシミュラクルの社会ではなく、現実の美学と実学を教えてくれるもの、リアルの世界で生きる術を教えてくれるものは何なのか？

ここで私たちが取り上げる「ワル」とは、「正義」と対峙する「悪漢」という勧善懲悪の概念で見た秩序破壊ではない。むしろハイパーリアルと化した無垢な世界を超えて、荒廃した現実社会を淡々と生き抜くサバイバルの術を私たちに示す「姿勢」なのである。

1. 現実の荒野に生きる「しびれる」体験

「由来、僕のもっとも嫌いなものは善意と純情との二つに尽きる」。

中野好夫はその著『悪人礼讃』(ちくま文庫、1990年)の中でこのように語り始める。善人ぶって正義感を振りかざす人間ほど胡散臭いヤツはいない。そのことをわれわれは経験で知っている。頭でっかちで気取り屋さん、ようは自分を裁定者の側においている人間には自己保身しかない。相手に対する攻撃によって自らが「無垢な世界」の秩序維持者となるだけである。そうした秩序維持のための「善意」と「純情」が鼻につくのだ。

秩序維持は動物の縄張り争いにもある。もちろん動物に「正義」や「善意」の概念はない。しかし彼らは自分の縄張りを維持することによって、正義の使者となる。正義とは、自分たちの集団秩序を維持する権力の別名に過ぎない。そしてすでにこのことは、世紀末にドイツの哲学者ニーチェが理解していたことだった。

もはや昔話だが、かつて全共闘世代の若者たちは、同時代最強のイデオログである吉

本隆明に陶醉し、その「共同幻想」という言葉に魅惑された。自分たちのいる現実社会はたんなる「幻想」に過ぎず、その感覚を皆で共有しているだけである。だからそんな幻想を捨てて現実の歪みを糾すべく「革命」という美旗のもとに自らの身を捧げるべきだ。そう考えて若者たちは大学当局と団交し、あるいはゲバ棒を持ち出して、現実の痛みを感じようとしたのだった。たしかにこれ自体は、すでに高度経済成長期を経て、無垢な、痛みもない「一億総中流」の豊かな社会で生きてきた当時の若者が、彼らなりに「現実」の苦難を感じて、その混沌とした現実の中で自己を「変革」し、自己の存在を確かめようとした行為であった。

ところが全共闘世代の若者たちが残念だったのは、既存概念である「共同幻想」と既成の社会秩序とを潰すために、逆に自分たちの仲間内で理想社会について別の「共同幻想」を作り出してしまった点である。これでは自己形成はいつまでも現実には到達せず「幻想」とともに堂々巡りをする。自己の存在意義も空想の中で得られる意味づけでしかない。自己はいつまでたっても現実の世界へと降りてこず、まさに「煉獄」での英雄に留まるのである。

吉田喜重（1933-）の『煉獄エロイカ』（1970年）では、学生時代に革命運動に参画していた主人公の男性が体制側の科学者エリートとなって登場してくる。若い頃に英雄を気取っていた主人公は、スパイの濡れ衣を同志から着せられて絞首刑となる夢を見ながら、この世とあの世の境界である「煉獄」を夢遊する。登場人物たちはみな無機質な近代建築のコンクリート空間で押し潰されそうになっている。やがて主人公は年老いて、夫婦愛のために残る人生を捧げたいと述べて終わる。美しくなった社会を「幻想」だとして破壊を試みたが、結局は自ら理想社会の「幻想」に絡め取られた若者たちの成れの果てが見事に描かれている。

連合赤軍で終焉した理想主義はいまや、「ジュラシック・パーク」でしかない大学のごく一部の教員だけが所有するものとなった。彼らはいまだに平和と民主主義の理想社会を目標に、「教育」と言う名前の政治活動を展開している。その「政治的文化主義」の源泉はすでに別の拙稿で見た通り、戦前から戦後までの主知主義、すなわち無垢な理想世界を実現したいという頭でっかちの知的エリート主義にある。しかしその大学ですらも、少子化での学生獲得による生き残り戦略で、いつまでも「教育理念（という政治思想）」ではやっていられない。ジュラ紀の遺伝子に拘るならば、氷河期を前に大学ごと絶滅するのである。

はたして人工的な風景が敷き詰められた豊かな社会で、人々はもはや無垢な「理想」の美的秩序に組み込まれて生きるしかないのか。そこから抜け出して現実の「荒野」を生きる術はもはやないのだろうか。私たちが「ワル」という概念で捉えようとするのは、現存する「正義」か、あるいはそこからはみ出す「悪」か、という二分法では理解できない態度、あるいは人工的な「美」か、廃れた「醜」か、という二元論に回収されない生き方なのである。

「ワル」は決して生きる意味を求めない。何らかの価値を達成するために生きるのでは

なく、むしろ生きることそのものが自分の存在を肯定してくれる。「ワル」が体現する姿勢は、その場所に生きる生命力、野性味ある身体性、苦難の経験、粗野な現実感、力強さ、たくましさ、太々しさ、図々しさ、強烈な存在感などである。自分流のスタイルだ、と敢えて考えなくともよい。生きることには素直であり、後悔などしない。生きることへの強い意志を持ち、生きることに対して前向きである。その姿勢が、鋭い眼差し、引き締まった顔つき、堂々とした態度、据わった腰付きに表れており、全体としてオーラを発している。破天荒のようにみえるが、しかし、自然体のまま「しびれる体験」をしながら実直に生きる姿が人々にまでも感動を与えるのである。

現実そのものをひたすら生きる姿勢は、たとえばヴィム・ヴェンダース監督の『ベルリン天使の詩』（1987年）に登場する墮天使ダミエルに現れている。彼は、「精霊」という永遠に実体のない存在から、死すべき人間世界の浅瀬へと降りていく。色づいた景色、コーヒーの匂い、タバコの煙、恋愛感情、心の葛藤、そうした人間の現実を精一杯に経験する。まさに「生きる」のであり、「存在する」のである。身体に直接的に感じられる現実がそこにはある。全国一律の「リアル」ではない、もちろん再起動のきく「ヴァーチャル」でもない、まさしく「しびれる」体験である。

平野啓一郎はその著『「カッコいい」とは何か』（講談社現代新書、2019年）において、「カッコいい」と感じるためには、「しびれる」体験が必要だと述べている。「経験する自己」の体験を通じて人々は「自己発見」をし、人生を理想化する。また「カッコいい」他人の行動に同化する。それは政府主導で上から実現される経験ではない。むしろ個人の「体感」であり、自分たちの自由な変化である〔平野 2019：423-468〕。

しかしこれは「カッコいい」ものへの体験だけではない。生きることそのものがまさに「しびれる」体験の連続である。ただし平野の取り上げる「ダンディ」はその「しびれる」体験において「ワル」と異なっている。この違いは事例をもって説明していくことになる。

ひとつだけここで「ワル」の事例を示せば、山田清機『不器用な人生』（朝日文庫、2015=2019年）では、例えば羽田の老漁師が取り上げられる。シジミ漁で生計を立てるその老漁師は、すでに寂れて衰退の影が広がる東京最後の漁師町で暮らす。昭和という胡散臭い時代の象徴のような空間で、しかし漁協の最高齢者として八十歳を過ぎても現役である。中学二年生のときから父親と一緒に親子乗りを始めて、羽田空港建設の補償金で大半の漁師が辞めていく中でも漁を続けた。事前準備に鉤を何百本も手作業でテグスに結んで、その一本一本に餌を付けて海に流す作業を毎日繰り返す。寒くても問屋が漁をしてくれと頼んでくれば船を出す。海が好き、漁が好き。365日、ひたすら仕事をして、それを一生続けるのである〔山田 2015=2019：243-273〕。このルポルタージュでは、こうした直向きに仕事に打ち込む人物の姿がさまざまな職業において描かれている。これらは現代から見れば、どちらかといえば「カッコ悪い」生き方であるかもしれない。しかしながら、私たちはそのような生き方、行動に対して「しびれる」のであり、これが「ワル」という姿勢である。

たしかに私たちの「生」は「軽い」のかもしれない。「永劫回帰」というものがあるならば、「現実」は何度でもゾエトロープ（回転覗き絵）のように同じことを繰り返すだろう。ミラン・クンデラ（1929-）が言うように、それならば我々の「現実」は非常に重いものとなる〔ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』集英社文庫、1984年=1998年〕。ところが実際には現実是一次限りであり、その世界での我々の存在もどのように行為しようともわずか一次限りの出来事である。だから「軽い」のである。その軽い存在という運命を背負った私たちは、しかしさまざまな経験を積み重ねて、現実を精一杯に生きようとする。私たちが「ワル」の中に見出そうとするのは、そうした一次限りの「軽い」現実をただひたすら生きている存在のことである。

2. 無垢な空間の実利主義と白ヒツジの群れ

日本のニュータウン開発は、1960年から開発された千里ニュータウン（吹田市・豊中市）を皮切りに、1965年の泉北ニュータウン、1966年のポートアイランド（神戸市中央区）と続いた。私ごとで恐縮だが、1962年生まれの私も70年代になって小学校6年生のときにこのようなニュータウンの一つに引っ越した。それまで生まれ育った下町の生活空間が一変した瞬間だった。ニュータウンには同質な家が並び、住民を区別する認知構造もなく、全員が同質な人々で占められていた。

ただ、そのニュータウンからやや外れた場所にあった仮設住居のような家に住んでいた子どもにはいじめがあった。子供たちはその子に対して、自分たちの同質性を脅かす存在だと感じたのだろう。また、勉強に対して極端に理解力がなかった生徒に対してもいじめはあった。ほぼ100パーセント同質な集団の中でのわずかな違いを子供たちは見逃さなかった。その意味では、かつて雑多な異質性が混在する下町での少数者差別よりも、同質性が支配するニュータウンでのいじめのほうが陰湿であったかもしれない。

ニュータウンに住む郊外の人びとは、子どもを塾に通わせ、家族の地位向上に熱心であった。クラスにガキ大将はいたものの、学年全体を一元化する同質仲間の核のような存在であった。以前の伝統的な地域のような年齢の上下関係はなく、別の学年の子どもとの繋がりがほとんどなかった。団地の中では近所で遊ぶ場所もなく、同学年クラスの友達だけが唯一の仲間だった。仲間集団は年齢的にも同質化した。人工的に美化されたニュータウンでは、子供たちは荒野を生きる力が希薄であった。それでも、そういう仲間と近くの野山に「探検」に出かけるなど、それなりにまだ外での集団行動はおこなっていた。人工的な空間からときどき自然の中へと戻って、自然を体感した。

もし私が生まれた時点ですでにニュータウンという無垢な空間にいたとすれば、その後もこうした世界に馴染んでいただろう。大学でさまざまに思想に触れて、体系だった完全無欠の「理念」に触れて、そのまま無垢な理想を現実化しようとしていたかもしれない。しかしもとも生まれ育った現実とは、狭い六畳一間に4人家族が肩寄せ合って暮らし、ダンプカーが夜中でも轟音を立てて走っていた。身近な世の中も平穏ではなく、特定地域への差別がすぐ身の回りに普通にあることも、身体で覚えている。生きた人間存在が見え

ないニュータウンは、まるでウルトラマンに出てくるセットのような異次元空間だと感じた。ごく少数の「異質」だけを排除すれば「美しい社会秩序」が完成するなどという実感は、子どもの私にはまったくなかった。

高校生になって興味本位に同級生たちの「勉強会」にも一度だけ参加したこともあるが、そこも奇妙な「マジメさ」の規範が支配する世界としか映らなかった。大学生になっても、どこぞの学者や政治団体、宗教団体の考えた素朴な「理想郷」の胡散臭さは身についた嗅覚で感じ取っていた。すでに学生運動は下火だったが、「大学生らしく」、岩波文庫の『資本論』を全巻読んだ。たしかに当初はマルクスの「剰余価値」の計算に納得してしまったが、しかしそれ以上に影響されなかったのは、私の育ちの「ワルさ」のせいだろう。

幸か不幸か私は、母方の祖父が大工、父は製鉄所の技能工であり、「知識人階層」とはまったく無縁な家系に育った。親戚も含めて4年生大学卒は私が初めて。現実への対処を概念から入るのではなく、身体感覚から入っていく。家庭環境はそういう文化だった。

閑話休題。竹内洋は、彼の出身地である佐渡島の例を挙げていて興味深い。名士が多い地区では学校教育で与えられる知識による文化的教養が広がっているのに対して、漁師などが多い経済的に貧しく文化的伝統にも乏しい地域では「向こう気ばかりつよくて教養がない」が、行為に直結する身体を備えている地域である[竹内洋、『革新幻想の戦後史』上・下、中公文庫、2011=2015（上）：49]。また別の箇所でも竹内は身体的なものとエリート文化との乖離について三島由紀夫（1925-70）が書いた小説『宵のあと』を分析している。つまり物語では、有田八郎をモデルにした夫の野口は「知識人」であり近代的自我を経由して身体へとつながる。ところが妻である輝井をモデルにした「かづ」は庶民であり、行為に直結する身体を備えている。盆踊り大会での佐渡桶さの踊りに「かづ」は見様見真似で踊るが、有田はそれができないのである[竹内 2011=2015（上）：44-45]。

言うまでもなく竹内は学歴エリート研究の第一人者であるが、それに対して私たちが明らかにしようとする「ワル」は、どちらかという知識ではなく身体レベルで対応する庶民文化の中で培養される姿勢として考えられる。「ワル」は頭脳インテリと違い身体的感覚から動くのであり、「生きた教養」を体現しているだろう。

竹内はまた、高度成長期の日本、つまり小熊英二のいう「第二の戦後」においては、「花より団子」の精神性が強くなったという。もはや再軍備や憲法改正の是非だとかいう保守/革新の理念ではなくて、経済的に豊になった現状でよいという生活態度を人々は示すようになる。この時期には戦前から戦後にかけて活躍した政治家たちも保守・革新問わずに落選し、理念よりもむしろ「面倒みのよさ」を人びとは政治家に求めるようになる。つまり、理念・政治よりも欲望・実益優先の感覚が人びとの意識において強まったのである[竹内 2011=2015（上）：89-91]。

戦後すぐに広がった「理想」中心の共同体や、またもとの身体感覚による伝統的共同体は、高度経済成長によって解体していく。むしろ現状の豊さの維持・発展を追い求めた共同体、すなわち竹内の言う「第3の感情共同体」が日本を覆う。「だんご」志向はこうした経済的に豊かな社会が産み落とした感覚だといえる[竹内 2011=2015（上）：87]。

ただしこれは価値観というよりはたんに「欲望」としか言えないものである。そこには主知主義もなければ、伝統主義もない。「頭」と「体」の対立もない。それは機能主義的であり、あえて道徳というならば、「大きいことは善いことだ」もしくは「お金儲けは悪いことではない」という個人の「利」を「善」と見なす思考あるいは嗜好である。どこの町にも観られるニュータウンやショッピングセンターという風景こそは、実利優先、欲望中心主義のシンボルであった。しかも全国的に均質化したその風景は、集権的な管理システムが高度成長とともに日本に実装されたことを示しているだろう。

さて、高度成長期とバブル経済を経て、豊かさがすっかり自明のものとなった現代日本では、地方都市も大都市も、どちらもきれいに整備された街並みが続き、同質的なファミリーが仲良く暮らしている。もはや理想と現実のギャップはなく、このまま保護された世界で暮らしていけばよいだけである。都会に出てきた大学生も都市の喧騒に驚いてどこかしら「不在の美」なる社会秩序を求めたりはしないだろう。

「俗物」だらけとなった現代の若者。いや、職場を見渡せば同じことは大人たちについても言えるだろう。教養ある「ダンディ」でも、身体性のある「ワル」もいない。インテリ人間の美学だったダンディズムもなければ、向こう気の強さと飾り気のなさを誇る「ワル」志向もない。ただ社会的成功を求め、有名になりたい、他者から承認されたいという俗物主義が蔓延している。尊敬する人物はビル・ゲイツ、スティーヴ・ジョブズ、孫正義、若手ならば前澤友作あたりだろうか。あるいは知的職業が苦手ならば、一発成金、芸能人、あるいは仁義なき経済ヤクザの親分か。他者からの「いいね」によってお金が貯まるユー・チューバーこそが将来になりたい職業の一番人気である。

もしくは「オタク」君たちのように、現実にある困難を回避して、成功体験を無垢な二次元の世界に求めるだろう。もはや理念は決して現実の革命とは結びつかない。かつての「知的でヒューマニズム」な左翼は街頭で行動して革命を叫んだが、いまのヒューマニズムはアニメやコスプレの中にあり、それは自分たちのイメージの中で完結する。

日本全体を覆う保護カプセル。羊飼いは迷子になって何処かへ行った。残された羊たちはしかし各自の意思で行動もせず、その場所で草を食べている。食料は十分にあるのだから環境は十分であり、移動する必要もない。どこからか「神」が与えてくれるのだ。

しかしあるときオオカミがやってきても羊たちはまったく対応できないだろう。無垢な世界に生きる弱きヒツジたちはみんな白い。すでに「醜い」黒いヒツジはいじめて自ら除外してしまったのだ。飼い慣らされた白ヒツジたちからオオカミを守ることができるのは行方不明になった羊飼いだだけである。牧場にセットされた警報装置も監視システムも役に立たない。それでも羊たちはシステムが作動することを信じて疑わず、平気で草を食べている。もはや為す術なく「ゲーム・オーバー」となるのである。

しかしまだ間に合うかもしれない。いなくなった羊飼いを探そう。そして私たちの時代に必要な「ワル」を蘇らせよう。

3. 「生きた教養」としての職業意識と「ワル」

「ワル」はまた、職人氣質の姿勢とも関連している。職人が持っていた技に対するプライドや、あらゆるものに優先する仕事に対する誇り。さらにはそれを基盤とした職業倫理も培われる。神里は、プロフェッショナルの語源となった英語の「プロフェッション profession」とは、とくに聖職者、医者、法曹家において「その仕事を引き受ける」という公言であると述べている〔神里達博『リスクの正体』2020、岩波新書：145-7〕。たしかにドイツ語の職業 Beruf は、神から召喚されて就くべき仕事という意味である。

しかしながら、そのような神や共同体に対する公言よりも以前に、基本的には仕事そのものに対する直向きな姿勢から仕事への誇りは生まれるものだ。profession は、神里のいう「仕事を引き受けた」という公言ではなく、「間違いなく私はこの仕事に一途に打ち込みました」という「告白」と解釈したほうがよい。ひたすら仕事に打ち込むことは仕事の完璧さに繋がる。一心不乱に仕事をした自負が技に対するプライドや自信となって現れるのである。

「品質保証」も、間違いなく仕事に真剣に取り組んだことの自己告白であり、場合によっては職能組合による相互チェックもある。さらに他者の良き仕事に対する敬意も、他者が間違いなく一心不乱にその仕事に打ち込んだことに対する敬意である。「生きることそのもの」という「ワル」の要素は、こうして、熱心に取り組んだ結果としての自分の仕事に対する誇りや、さらには他人に対しての敬意へと繋がるのである。

また、職人たちの昔からの「しきたり」も、このような仕事への態度から生まれてくる。それは長年かけて現場の人間たちが編み出した人間関係や社会秩序のあり方についての「ローカル・ノレッジ」である。こうして仕事に打ち込む、日々の暮らしを真剣に生きるという「ワル」の姿勢は、「生きた教養」として、社会秩序に対する判断力を養うことになる。

ところが近代社会では分業によって専門家・エキスパートが増大すると、自分の専門以外に関心を持たなくなる。彼らは組織の中で分業の一部を担うだけであり、自分の仕事に対する誇りが出てこない。専門家たちは分業組織体制の中で、規則や命令に従って担当部分を実施するだけである。完成形に責任を持たないエキスパートは、だんだんと仕事へのプライドがなくなっていく。自分の仕事に誇りがなければ、他人への敬意も生まれない。専門外の事柄への判断力も培われない。

学問探究から生まれた知的エリートの「教養」も、たんに自分たちの専門知識の誇示に過ぎなくなる。学問的「教養」が、知識増強によって自己の組織内での立場を向上させるために利用される。あるいは「文化資本」(P・ブルデュー)として、社会的に階層格差を図るための道具となるのである。

職業意識で大事なものは、上記のように「誇り」である。たしかに現代の仕事において「誇り」はほとんどなくなっている。現代の仕事での誇りは、全体社会のなかで特定の組織にいてことで得られる「プライド」と、組織内で特定の地位にいてことで得られる「リ

スペクト」である。しかしこれではもはや、仕事に打ち込むことそのものから「誇り」は得られない。現在の経営学が述べているような社会的地位や組織内地位による職業意識の形成では、仕事そのものに打ち込む姿勢で誇りを持つことなどできないのである。

余暇のほうはどうだろうか。かつて労働省が1978年（昭和53年）11月に、おもに満25歳未満の常用労働者に実施した調査では、実際に行っていた余暇利用のあり方として、回答者のうち25パーセントが国内旅行、また休養も25パーセント程度であった。これに対してスポーツをしていると回答したものは10パーセントに満たない。

面白いことに「余暇が生きがい」と回答した人には、「休養」としての余暇利用が多い。職種別で余暇に「休養」の使い方が多かったのは技能工・生産工程作業者とサービス業である。仕事に多くのエネルギーを使うものの、たんに辛いだけでそこでは生きている感じがしない。そこで余暇時間にゆっくり「休養」することにおいて初めて、選択肢にある「生きがい」というよりは、リラックスして「生の回復」ができたのだろう。

しかしここには、自己陶冶など存在しない。仕事においてもひたすら打ち込むことなく、エネルギー消費をするだけであり、さらに余暇でも行動の指針を獲得するどころか、行動休止としての「休養」しかない。だから仕事時間が短くなって、やがて余暇でスポーツに打ち込み、あるいは旅行をすることは、憧れの「生き方」だったのだろう。

また今後理想とする余暇の過ごし方については、スポーツや運動は平日、休日とも20-30パーセント、旅行・ハイキング・ドライブが休日には多くて60-70パーセントである。仕事でエネルギーを使い、余暇までスポーツでエネルギーを使うよりは、日常とは違う場所で気晴らしするほうがよいのだろう〔労働省婦人少年局編『現代の働く若もの像』1980年、大蔵省印刷局発行〕。

実際に広田らの研究では、1960年当初はまだ労働時間が長くて余暇時間が取れなかったが、やがて労働時間も短くなり、また賃金も上昇することで余暇を利用できるようになったという。各自の生活スタイルによって、それぞれに余暇を楽しみ、またその目的もさまざまとなっている。高度成長期において人々は「スポーツをもっとやるべきだ」という価値観があってスポーツをおこなっていたのではない。人々のスポーツに対する目的は勤労青年では「気晴らし」であったり、「家族との触れ合い」、また「健康の維持」であったりする。余暇がどれほどに人生に意味や彩りを与えるのかは個人のライフスタイルによって多様であり、そうした余暇活動の中の一つがスポーツに過ぎない〔広田照幸、河野誠哉、澁谷知美、堤孝晃、「高度成長期の勤労青少年のスポーツ希求はその後どうなったのか―各種調査の再分析を通して―」『スポーツ社会学研究』19巻第1号、2011、3-18〕。

このように、いまや仕事においても余暇においても、「そのものに打ち込む」姿勢はそれほど多くないと言えるのではないだろうか。一方で職業が「エキスパート」化していくと同時に、他方で顧客も「クライアント」化している。すなわち専門家あるいは専門機関に依存して、クライアント化した余暇行動が見られる。ここでも専門機関が人工的に仕立て上げたレクリエーションを楽しむことになっている。もちろんそうは言っても、自分なりの生活ペースに合わせて余暇を過ごす人たちがいるのも確かである。仕事と余暇との生

活全体として、家族や友人や近隣とともに生きているといえよう。

かつてH・シェルスキーは、現代において学校が果たすべき役割に職業教育とともに余暇教育があると述べた [Schelsky, H., *Schule und Erziehung in der industriellen Gesellschaft*, 1965=H・シェルスキー『産業社会の学校と教育』有信堂高文社, 1984年: 79-80]。余暇は労働や職業の負担に対する代償である。労働では与えられない心情や生きる喜びを消費と生活水準で補う。余暇を人間らしく満足させ、消費者的な娯楽や休養、寛いだ生活そのものを十分に営む能力、具体的には性教育、家事の技術、結婚生活などの能力を身につけさせるべきだという [Schelsky 1965=1984: 33]。シェルスキーはまた労働と余暇の構造から日常生活の意味、秩序、生きる喜びを獲得するため、職業労働のあり方とともに、自律的な余暇態度に向けて教育すべきだという。消費者の選択や距離の能力、不精や遮断の能力、享樂の制限や集中能力の強化などは重要な教育となるだろう [Schelsky 1965=1984: 73-9]。

しかしながら現代での「教養」はすでに「休養」や「娯楽」であり、内面的・精神的な自己訓練という意味は少なくなっている。「教養」は消費者にとっては休養と気晴らしに過ぎず、個人的な威信や自尊心の欲求のために用いられていない。こうした余暇態度から人間に固有の最善な態度や心情の満足へ、あるいは消費の節度や作法へと導くことは可能なのだろうか。

ここでも「ワル」の概念が必要だろう。「生きる喜び」や「生活の意味づけ」を理念的に獲得するのではなく、身体的にそれらを「感じる」能力が形成されるべきである。例えばダンスやスポーツにおいて滑らかな身体の動きを身につける。登山やスキューバダイビングで大自然を感じる。食材の香りや伝統的な食事の味わいを覚える。五感で日々の生活を実感して、生きることにそのものに「しびれる」ことが、仕事と同様に余暇でも「生きた教養」を生み出す時間となるだろう。

4. 「安心安全」を超えた「自由」としての「ワル」

こんにち、ヒト・モノ・情報の流れのグローバル化で、国家による統制すべきリスクはますます拡大している。あらゆる「安全安心」は国家ならびに専門家に委ねられている。自然災害、ウイルス対策、テロ対策も然り。国家による子どもたちの厳罰化も然り。そうやってリスクを減少させて、客観的「安全」と主観的「安心」とを維持する。

最上敏樹は、今回のウイルス危機において湧き上がった政府批判の裏を返せば国家待望論でもあるという。まず政府に大号令を出してもらうことを求める空気。敵であるウイルスに対して何をして構わないという雰囲気と同様に市民に対しても何をして構わないという傾向。個人に対する監視システムが強力に作動していることを指摘している [最上敏樹「世界隔離を終えるとき」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』岩波新書, 2020, 191-3]。ウイルス危機によってさらなる国家の一元管理は強くなり、そして専門家の科学技術による「安全」のシステムによって私たちの「安心」を得ようとしている。

近代化は技術と権力の再配置を伴う。多くの権限が中央政府に集中する。技術の発展と

権力の集中によって、より大きな「リスク」を管理することができる。そして私たちは「安全」と「自由」を手に入れるのだ。

こうなると個人は判断力など要求されない。社会環境の安全確保は国家ならびに専門機関がしてくれる。いまの学校教育で教える「主体性」などは、あくまで科学技術を生み出す学力を自分で勉強する「主体性」に過ぎない。国家による集中管理に基づく秩序のなかでの「行動知識」を教えているに過ぎない。生徒たちが自主的に、生きるための判断力を養い、どんな荒野においても生きていける「サバイバル術」などではなくなっている。

個人の「自由」は、このような国家による安全管理を前提にのみ入手するものとなる。ジャーナリストが「自己責任」において、政府管轄外の紛争地域に取材に行く「自由」などない。「自由」は個人の責任を伴わない、政府のリスク管理の下での「自由」に過ぎない。「個人の責任」と一体化した古典的な「自由」概念など、もはや存在しないのである。

こうして個人的責任が不要となった社会では、そこで対応できない顧客は見放される傾向にある。問題のある人物に対して近隣社会での対応ができなくなり、「クライアント」として専門機関での対応に任せる。ところが専門機関でも対応しきれない場合、もはや更生する場所がない。現代社会は専門機関の「クライアント」としてさえ対応できない人間を「処分」するしかないのである。

同様のことは大人だけでなく子供についても言える。神里は、少年犯罪への厳罰化を求める世論が出てくる背景として、現代社会がもはや「子供」という概念を捨て去ろうとしていると推測している〔神里達博、前掲書：128-131〕。たしかに「地域社会」の絆がなくなり、子供たちの面倒も専門機関に任される。現場で蓄積されてきたローカルな知識は重視されなくなる。いまや人々にとって、地域あるいは親族・家族で養育すべき「子供」は存在しない。伝統的なコミュニティの解体はすなわち「子供の不在」となって現れる。地域や親族・家族のなくなった子供たちは社会の専門機関によって「厳罰」にすべき存在となるのである。

しかしこれまで人々は、なんの保証も得られない環境で自力でやってきたはずだ。国家や専門家の保証する「安全安心」など何もなく、自分で責任をとるしかない状況で、ひたすら生きること、ひたすら仕事に打ち込むこと、苦しいときにも専門機関に頼らず自力回復すること、それらを実行してきたはずである。社会の管理が専門化しかつ集権化した時代よりも以前は、私たちはみな必然的に「ワル」の姿を表してきたであろう。職業としても懸命に生きるとともに、顧客としても自分たちのルールに従う。すでに私たちの知識から消去されてしまった方法で、「生きる」ために養育し、「生きる」ための更生を試みたはずである。

石井美保は、現代のリスクとしてのウイルス問題は、人間による自然の過剰な介入、人間による他の生物への過剰な介入によって齎された結果でもあると指摘する。そうであれば危機管理は、人と人、人と他の動物・自然との関係性を見直し、危険をはらんだ「他者」との接触リスクに対して、身を守るための規範やモラルを再構築することが必要だという〔石井美保「セイザンコウの警告」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』岩波新書、

2020, 219-132]。

たしかに石井が述べるように、「個」としての自己が幻想であったとき、集合体としての「われわれ」の境界をさらに防衛し強化するために、統治と監視のネットワークに私たちは進んで参与している。そうして同質的な秩序がつくられ、国家と専門機関による秩序維持がなされ、そこに私たちの「自由」も依拠している。

しかし、私たちは「ワル」の探究によって、ふたたび、「個」としての自己のサバイバルを探してみよう。それは破れ去った左翼の若者が取り憑かれた「主体性」などではない。そもそも全共闘は集団でしか行動しなかった。本当に個人が荒々しく、太々しく、この廃墟と化した現実社会を生き延びる方法。その解決はもはや「思想」の中には存在しない。むしろ現実世界で直向きに生きる個人を探し出すことから始めたい。国家の制御に縛られない存在、しかもたんに一元化に「反発」するのではなく、巨大な近代組織が張り巡らされた今日でも、それに押しつぶされない生命力を持つ態度として、「ワル」を考察する。

次節では、城の演習に参加する学生たちとともに「ワル」のさまざまな事例を分析する。歌、写真、映画、アニメなどの中に、私たちは「ワル」を探した。「ワル」研究はまずはさまざまな事例に接するなかで、さらに概念化を進めていく作業となるだろう。

5. 「ワル」の事例分析

5-1. 映画に見る「ワル」の生命力

(城 達也)

(1) 三島由紀夫は近代的精神のひ弱さを埋めるべく、身体鍛錬に時間を費やした。「精神」の補完物として「身体」を考えた。彼は近代主義者だが、同じ近代主義の精神部分よりも、ギリシャ彫刻のような身体性を重視した。こうした身体性の重視は近代初期からあるし、ナチズムでも登場する。庶民的な漁師たちがふだんの生活行動から身体をつくっていくのに対して、三島はボディビルによって欧米人のような肉体を手に入れる。

これに対して、セバスティアン・サルガドの写真は、純粹に生きることそのものとしての身体的たくましさ描かれている。人工的ではなく、純粹に生きることそのものから出てくる身体性である [Sebastiao Salgado: *Workers*, 2005, Aperture], [セバスチャン・サルガド DVD『地球へのラブレター』]。

サルガドの写真を見れば、金鉞で働く労働者、船乗り、あるいは遊牧民やインディオにその粗野で実直な生きる力が表現されている。それとともに、象やシマウマやトドなどの動物たち、そして煌々とした大自然の姿まで、すべてが現実の生きる存在感を示している。「野性味」というのは文明から見た場合の表現であるが、それよりもまさに自然界の状態としての粗野な現実がある。たんなる「肉体美」というより、生きること自体、生命力、苦難の経験、粗野な現実、力強さ、生きる力、太々しさ、逞しさを感じる。「ワル」はそうした姿勢の中に息づいている。

また鬼海弘雄の『東京ポートレイト』(クレヴィス, 2011年)に出てくる人物たちは、それほどの「野性味」を感じさせない。しかしその鋭いまなざし、圧倒的な存在感、図太

く生きている人たちが登場する。さらに鬼海は、このような人物が生息する街もカメラに納めている。そこには無垢なニュータウンとは全くことなる粗野な下町の生き様がある。組織もなく、したがって「管理」もない世界で、しかし逆に言えば自分の力だけで自己責任の世界に生きる人々。それが「ワル」の生き方である。

(2) ヌーベルヴァーグの騎手であるジャン＝リュック・ゴダール（1930-）の映画には、「ワル」の諸要素のうち「生命力」「ある種の逞しさ」が現れている。『勝手にしやがれ』（1960年）では、泥棒稼業の主人公ミシェルは車や金銭を次々と盗んでいく。いろんな偽名を使い、女性関係も派手である。あるとき車を盗んで追いかけられた警官を射殺してしまう。だが太々しくも逃げずにパリに戻り、アメリカ人の彼女とデートを繰り返す。しかしだんだんと警察の捜査が迫り、最後は恋人が警察に通報する。そして刑事に狙撃されて死亡する。

たしかにこの映画ではタイトル通り、モラルを欠いた若者たちの自分勝手な行動が描かれているのではあるが、しかし主人公とその恋人の行動には、無邪気であるとともに、生きる力強さ、生きることへの執着がある。また生きることそのものを楽しんでいる姿が捉えられている。

こうした要素は、『女は女である』（1961年）で、子供がほしい彼女と知らない彼氏との恋愛物語の中で、女性のほうの逞しさにも感じる。また、『気狂いピエロ』（1965年）で、途中で絵や文字が挿入される強烈な映像の演出とともに、主人公の女性が愛人の男を殺してしまったにもかかわらず、昔の恋人と再会して南仏へと逃げるたくましさにも描かれている。最後はまた別の男と逃げる女性を、昔の恋人は銃で殺し、彼自身も青い海をバックに自殺する。これも若者たちの自分勝手な行動の描写ではあるが、その強烈な生への憧憬がある。

最後に、『マリア』（1980年）では、両親の離婚を前にした少女の心境を表現しているが、マーラーの交響曲に合わせて力一杯踊る少女の姿は、家庭環境に負けずに生きようとするたくましさを感じる。

(3) 日本の鬼才・若松孝二（1936-2012）の『新宿マッド』（1970年）では、息子を殺した自称「革命家」たちを探す父親が主人公として登場する。「正義」のために息子をスパイとして殺したという革命家の新宿マッドと対決する。思想であれ音楽であれ現実逃避で生きている若者たちに対して、息子を殺された父親は、九州の田舎で郵便配達人を25年間やってきた筋金入りである。息子を殺した犯人を見つけることにまさに一途になる。そして犯人たちのアジトにやってきて、社会革命を起こすと囁く若者たちに、何もできないくせに偉そうに言うな、息子をどうして殺したのだと詰め寄る。映画の冒頭に内ゲバで殺された多くの死体が映るが、理念のために生きているものを殺していく左翼運動への批判が示されている。

若松の作品は全体に思想運動に身を投じる活動家への批判がある。『天使の恍惚』（1972

年)でも、爆弾テロを謀る過激派組織の活動家たちの、革命幻想と権力欲と性的欲望が混在する姿を淡々と描いている。また晩年の若松の作品である『実録・連合赤軍』(2008年)や、『11.25自決の日』(2012年)でも、理念に囚われた若者たちの悲哀が映し出されている。ただし、彼らがそれぞれに真剣に生きようとしてきたことについては美化することもないが、茶化すこともしていない。どちらの映画でも若松は、現代生きる若者の理念に被れた儚い自己形成の物語を映し出し、しかも真面目に時代遅れの思想に翻弄されて生きる無様な姿をそのまま表現している。

(4) 若松映画にも登場する俳優、内田裕也(1939-2019)には、まさに「ワル」が体现されている。もともとロカビリーのバンドマンとして出発した内田だが、若松孝二監督・内田裕也主演『水のないプール』(1982年)では、地下鉄の駅員として主人公を演じる。家族から疎外され、仕事にも生きがいを感じない。暴漢に襲われている女性を助けたのをきっかけに、やがて自ら性犯罪に走るようになる。ここではレイプした女性をひたすら愛する主人公の姿があり、警察に捕まったあとにニヤリと笑う姿は太々しい。

崔洋一監督・内田裕也脚本/主演『十階のモスキート』(1983年)には北野武も出演しているが、内田扮する警察官である主人公は離婚で慰謝料が必要となりボートレースに手を出す。損失を出してサラ金で金を借りて借金が膨らむ。最後は郵便局に強盗に押し入る。逮捕の瞬間、やはりこの男はニヤリと笑う。妻にも職場にも見放された男が社会への反抗として銀行強盗をする姿が表現されている。

滝田洋二郎監督・内田裕也主演『コミック雑誌なんか知らない』(1986年)は、当事者に出演してもらうという半分はドキュメンタリーの映画である。内田が演じる主人公は芸能レポーターであり突撃インタビューをする。その姿は太々しくも逞しい。とくにロサンゼルス殺人事件の三浦和義本人が出演して、真剣にインタビューする。また豊田商事事件の永野会長刺殺事件を再現し、永野を刺殺する右翼の男役に北野武が出ている。レポーターの内田はマスコミのカメラを前にして、テレビの仕事に疑問を呈する。

(5) 北野武(1947-)の映画は、もっと人情味のある「ワル」が描かれている。

『その男、凶暴につき』(1989年)では、暴力的なはみ出し刑事が、ホームレスを襲った子供たちを殴る、取り調べでも容疑者に暴行するなど、治安の専門家としての警官に相応しくない行動をする。犯人に対しては全身全霊でぶつかっていく。とくに同僚刑事の敵討ちのためにヤクザを次々と殺していく。

『ソナチネ』(1993年)は映像手法としてゴダールの影響が出ている。平気で人を殺す残酷なヤクザの親分が、子分とともに沖縄での抗争に駆けつける。しかし抗争中にもかかわらず沖縄の青い海と白い砂浜を背景にして子供のように遊ぶ姿を描く。やがて自分たちが同じ組の仲間からハメられたことが分かり、子分の復讐をする。ここでも社会からみれば破天荒だが、ヤクザとして自分なりにひたすら生を全うしようとする人物像が描かれている。

『HANA-BI』（1998年）では、元警察官の主人公が借金取りへの返済と妻の病気を治す費用のために銀行強盗をする。結局は警察に追われて、最後の時間を妻と2人で過ごしたあと、心中する。ここでは妻への直向きな愛が描かれている。

『菊次郎の夏』（1999年）は主人公である元ヤクザの男が近所の少年を母親のところに送り届けるというロードムービーである。道中、さまざまな出来事を経て、二人の絆は深まる。やっと母親のところに着いたが、ところが母親は別の家庭を持っていた。少年を慰め、励まししながら帰路に着く。少年とともに元ヤクザの男も、旅でのさまざまな出会いを通じてともに成長していく姿が描かれている。

『座頭市』（2003年）の主人公は人殺しを職業として生きる。病気の妻を助けるために用心棒を家業としている相手とも戦う。ここには「正義」も「悪」もない。似たもの同士、アウトローとして生きようとする人間の姿が描かれている。最後は悪玉の親分を斬り殺す。

北野武の著作『大親分！』（河出新書、2020年）では、ヤクザの親分という悪役たちのどこか憎めない人間性を描いている。本業以外に別のことにも一途に凝りだす。「ちゃんとリーダーシップ取れる人間は専門以外のことでもずば抜けてたりするんですよ」という。専門外の知識が血肉になっている。無理難題を言いつけて周りを困惑させるこの親分たちは、じつは北野武自身の自画像だと言う。

5-2. “ワル” が持ついくつかの「顔」

（人間科学部2回生 中塚美有）

（1）ぶれない自分

どのような人物が“ワル”なのか。なぜ“ワル”だと思うのか。“ワル”にはなにか共通しているものがあると思う。その共通しているものとは大きく分けて3つあると私は考える。

まず一つ目は「自分をもっている」ということだ。例として VIGORMAN の『大人が言う』（2018）という曲を挙げる。この曲は VIGORMAN 本人がまだラッパーを目指していた時のことを歌詞に書いている。ラッパーを目指すということは成功するという確証がないため周りの大人たちはそれに反対した。だが VIGORMAN はラッパーになりたいという一本の目標をしっかりとたて大人になにを言われても諦めなかった。だから今このようにたくさんの人に知られるラッパーとなった。題名の『大人が言う』とは「また大人がどうせできないと決めつけてくる。でも自分はやりたようにする」という意味が込められたものだと考えられる。また自分と同じように周りから無理だと決め付けられるようなことに挑戦しようとする人間にも勇気を与えているだろう。

他にも映画『バッドボーイズ』（1995-2020）にもこれにあてまるものがある。この映画はマイアミの警察官二人が主人公となって様々な事件を解決していく話だが二人の掛け合いがテンポよく行われていてコメディ要素が多くあるにも関わらずとてもスリリングな作品になっている。主役となる二人が警官の身でありながら“自分流”にのっとなって捜査を行っていくその姿は世の中の決まりごとには縛られず自分達のやりたようにしている

自由さがうかがえる。VIGORMAN も『バッドボーイズ』も世の中の“普通”には囚われていない、自分の道を突き進むという強い思いが共通している。

(2) 内からあふれる力強さ

二つ目は「力強さ」だ。私の思う“ワル”は目つきが鋭く、気迫があり、オーラが漂っているように思える。それはこれまでの経験や出会い、なにがあってこの人は「今のこの人」になったのだろうと考えさせられてしまうほどの圧がある。

この例として漫画『クローズ』を挙げたいと思う。『クローズ』(1990-1998)とはヤンキー学校のテッペンを主人公がとりにいくというストーリーで二つの学校で戦ったりもする。喧嘩上等でまさに“ワル”の巣だ。写真から見ても分かるように目つきが鋭く、「何か一つのもの」をしっかりと見据えているように思う。“ワル”としてのオーラが漂っていて近寄り難ささえも感じる。ここで言う「何か一つのもの」とは学校の“テッペン”で、まさにそれが一つの大きな目標であり「一本の芯」でもある。自分の目標のために目の前の敵を倒すという行動が目つき、気迫、オーラの全てに関係していると考える。



(3) ワルの友情

三つ目は「仲間意識」だ。“ワル”には様々な種類があると思うが、グループ・仲間・派・ギャングという複数で固まっている“ワル”も存在する。これらの“ワル”には服装を統一しているものもある。二つ目の要因で例に挙げた『クローズ』もその一つだ。学校の制服をユニフォームとし、一つの団体となり他にも髪型をそろえるなど結束の固さを表している。

ここで例に挙げるのは「サーペント」というギャングだ。この「サーペント」とは Netflix オリジナルドラマ『リバーデイル』(2017-2020)で登場する架空のギャングで、見てわかるように全員が同じ革ジャンを身にまとっている。革ジャンを着た何人もの人間が集まっているといかにも“ワル”らしい。このサーペントにはおきてがいくつかあり、それらはどれも仲間を大切にすることと直結している。トレーラー暮らしの者もいたり家族がいない者もいたり訳ありの人間が多いが「サーペント」が個々の「居場所」となっている。酒場の地下に溜まり場もあり、常に行動を共にし、一人一人が仲間のことを想って



いるので絆が固い。このような集団の“ワル”は結束の固さが特徴的だ。

(4) ワルの代表「ジョーカー」

“ワル”に共通しているものは大きく分けてこの3つだと私は考える。無論、他にも様々な要素があるだろう。そこで多くの人から“ワル”だと認識されているであろうキャラクター「ジョーカー」について目を向けたいと思う。

私がこのキャラクターに注目した理由にはその「描かれ方」にある。ジョーカーとはDCコミックのキャラクターでバットマンの敵役として登場する。敵役という役割でありながらジョーカーが主役の映画が作られたり他の作品にも登場したりと注目度が高い。そこで3つの作品を用いてそのジョーカーの描かれ方を比較したいと思う。

一つ目は既に挙げた映画『バットマン』(1989)で登場してくる敵役としてのジョーカーだ。この映画ではジョーカーは「理屈もなく、理由もなく、退屈を紛らわすために極悪非道な犯罪をおもちゃに遊び狂う男」とされている。「犯罪こそが最高のジョークだ!」と言っているジョーカーを見る限り、正真正銘の“ワル”だと断言できる。

二つ目は映画『スーサイドスクワッド』(2016)で登場してくるハーレイクインの恋人としてのジョーカーだ。この映画は様々な“ワル”が一箇所に集められ、断れない理由から協力して自分達の敵を倒すというストーリーである。ここで主に出てくるのはハーレイクインというジョーカーの恋人であり、ジョーカー本人の登場は少ないがそのハーレイクインを想うジョーカーがかっこよく描かれている。大悪党といわれる『バットマン』のジョーカーとハーレイクインを想う『スーサイドスクワッド』のジョーカーでは大きなギャップがあり、それがすごく魅力的に感じる。

三つ目はまさにジョーカーが主役の映画『JOKER』(2019)だ。この映画ではジョーカーが「現在のジョーカー」に至るまでのストーリーが描かれており、見た人は様々なことを考えさせられるだろう。病気・家族・友人の裏切りなどたくさんの悲劇がいきなりジョーカーに襲いかかり、大悪党といわれる「現在のジョーカー」へと変貌を遂げ、自分の苦しみを犯罪という行動を用いて世の中に発信する。このように映画『JOKER』は自分の悲しみや苦しみを社会に分らせてやろうという思いを抱くジョーカーに焦点を当てて描かれている。

これら三つの作品のジョーカーはそれぞれ“ワル”と言われていても全く違う印象を私たちに与える。様々な側面から見ると同じ人物とは思えないほどいくつかの顔をもっているジョーカーはとても興味深く魅力的だ。“ワル”という言葉なしではジョーカーは語れないというくらい“ワル”とジョーカーは切っても切り離せないものであり、“ワル”は“ワル”でも様々な種類の“ワル”が存在するということが分かる。

(5) “ワル”の多面性

このように音楽・映画・漫画・写真・キャラクターそれぞれに例を挙げ、“ワル”について述べてきたがやはりどれにも既に述べた“ワル”の特徴は共通しているといえる。ど

のような理由をもってその人を“ワル”と定義するのか、そもそも“ワル”とは何か、“ワル”についての理解がとても深まったと思う。そこには私が思っていたよりも奥深くて興味深いものがあり、いくつかの「顔」があった。“ワル”についてもっと知ろうと思えばきっともっと多くの“ワル”の特徴が出てくるだろう。それくらい“ワル”とは一言で言い表せられないほど多くの要素を持っている。

5-3. 「ワル」と呼ばれるカッコいい人たち

(人間科学部2回生 徳網菜桜)

(1) 勝ち気で貪欲に挑む

自分の気持ちに素直であることは「ワル」の特徴かもしれないけれど、悪いことでは決していない。夢や目標のために生きることは、むしろ良いことだ。しかし、なぜそれを「ワル」と呼ぶのか考えた。結果、「ワル」と呼ぶ人の立場が関係していると結論づけた。「ワル」と呼ぶ人たちは、彼ら彼女らがあるべき道から逸れているからそう呼ぶのだろう。世間や一般常識にとらわれている人たちからすれば、やりたいことをやっている人は風紀を乱して良くないように見えるのかもしれない。

しかし、私は「ワル」と呼ばれる人はとても力強くカッコいいと思う。今からそんな「ワル」を感じる作品を紹介する。

一つ目は、嵐の『Lucky Man』(2003)という曲だ。この曲にはかなり勝気な歌詞がいくつもある。例えば、「いま 世界を手玉に取って転がせ」や「欲しいモノなら全部 奪いつくせ」などだ。堂々としていて、強い意志を感じる。自分の思い通りにならないとは決して思っていない。補足すると、この曲は嵐がデビューして4年目にリリースされた。若々しさゆえの破天荒なイメージがジャケット写真からも見てとれる。また、コンサートでこの曲を披露するときは、観客も一緒にコールアンドレスポンスをして、「ワル」の一員になれるところがおもしろい。まるで自分が強くなった気持ちでいられる。嵐のメンバーもお祭り騒ぎのように派手な演出と共に、観客のほうを見て大声で力の限り歌う。それがすごく見ていて気持ちいい。



二つ目は、『ブルーロック』(2018)というサッカーマンガだ。原作は金城宗幸、漫画はノ村優介で、週刊少年マガジンで連載されている。第一話のあらすじはこうだ。主人公の潔世一は、インターハイ行きをかけた県大会の決勝戦の終盤、自分で点を取れるチャンスだったのに味方にパスを出して失敗し、それが原因で敗れてしまう。試合後、あの場面で自分がシュートを打っていればと嘆いていた矢先に、日本フットボール連合から「指定強化選手に選出された」との連絡が入る。そこには全国から有名なフォワードが300人集め

られていた。日本のワールドカップ優勝のため、他の299人を蹴落として最強のエースストライカーになるための過酷な訓練所だった。潔はそこで生き抜き、日本一を、世界一を目指すことを決意した。「世界一のエゴイストでなければ世界一のストライカーにはなれない」。この言葉がブルーロックのテーマと言っても過言ではない。

私は「エゴイスト」という単語に「ワル」を感じた。利己的で自分勝手だけど、本能には抗うことはできない。スポーツの世界はもしかしたら「ワル」であふれているのかもしれない。むしろアスリートは「ワル」でないと生きぬくことはできないのではないか。団体競技を扱ったスポーツマンガは、大体仲間の大切さを描いたり協力し合うことを良しとしたりしている。しかし、この作品はそうではない。なによりも誰よりも自分が点を取ることが一番だ。この強い気持ちが彼らを奮い立たせて、前へ進む原動力になっているのだろう。



(2) 力の使い方

三つ目は、『インクレディブル・ハルク』(2008)というアベンジャーズシリーズの映画のひとつだ。主人公は、とある条件下で緑の大男(ハルク)になる体質になった生物学者のブルース・バナー。そして敵対するのは、ハルクの力を欲した軍人のエミル・ブロンスキーだ。彼はブルースの血を注入して、もう一人のハルク「アボミネーション」へと変身し、暴れまわる。ブルースはハルクの力を失おうとしたが、町を破壊するブロンスキーの姿を見て自ら倒しに立ち向かい見事勝利する。



私はこの作品で、「ワル」と「悪」の違いを考えさせられた。ブロンスキーがハルクになる動機はシンプルで、大男のハルクの力が欲しいからだ。単純だけど真理を突いているこの動機は理解できる。自分の欲求に素直という点で、この時は「ワル」だと言える。それが「悪」に変わったのは、力を無理やり手に入れて、町を破壊する行動に出た瞬間だ。多くの建物や市民を巻き添えにしたというのも「悪」である点の一つである。「ワル」は自分の力で、または志が同じもの同士で目的を達成する。誰かに反対されることはあっても、関係ない人を巻き込んだり傷つけたりはしない。

(3) 「ワル」に必要なのは強い意志

四つ目は、『さよならぼくたちのようちえん』(2011)というドラマだ。タイトルの通り、物語は幼稚園児たちが主人公だ。卒園式目前のとある幼稚園で、五人の園児の行方がわか



らなくなる。五人が姿を消した目的は、登園しなくなった友達のいる病院までお見舞いに行くことだった。何があっても絶対に泣かないことを共通の約束とし、様々なトラブルに巻き込まれながらもあきらめることなく歩みを進めていく。

この作品を選んだのは、「ワル」に年齢は関係ないのではないかということだ。まだ五歳か六歳のこどもだが、幼稚園に行くということに反抗し、自分たちの目的のために必死だ。もちろん道中うまくいくことばかりではないし、心が折れそうになることも何度もあった。しかし、そうなるのは大人も子供も同じである。なによりも信念である約束を貫き通し、見事病院までたどり着けたその時には私も画面の中の子供たちと一緒に泣いてしまった。感情を剥き出しにしている、他

の人の心を動かせるということも「ワル」の要素のひとつである。

「ワル」には非常にさまざまな要素が絡んでいることがわかった。ただやはり大きな特徴は、自分の気持ちを大切にしているということだ。自分の野望、夢、目標のために努力を惜しまず決してあきらめない。その強い意志がとてもしっかりしている。見ていてすごく気持ちが良い。

私は今まで、このあたりまでできたらいいやと妥協して生きてきた。安全圏を選んできた。しかし、この「ワル」とはなにかをずっと探ってきて、考え方が変わった。自分が本当にやりたいことをやりたい、限界を決めつけたくないと思う。自分の可能性を否定せずに、「ワル」として生きたい。他人にどのように言われても関係ない。これから先なにかの決断で迷うことがあっても、自分の判断を信じる勇気を持つことができた。「ワル」はとても力強くカッコいい存在だ。

5-4. 「ワルは悪ではない」

(人間科学部2回生 岡本唯那)

(1) 映画に表れた「ワル」

・『ぼくらの七日間戦争』(1988)

中学生の男子たちが理不尽なルールで子供を縛りつける大人と喧嘩をする。中学生が大人に勝つことは難しいことだが、力を合わせて確かにある大人への鬱憤を態度に表して真正面から挑む。この「戦争」にはゴールがない。しかし、ただ単に暴れたいわけでもなく謝ってほしいわけでもない。そして、籠城が終わり、怒られた後も反省を全くしてない。彼らは結果や後のことを考えずに、反抗の過程を夏休みの思い出として結果的に楽しんでいたのだ。

・『お嬢さん』(2016)



初めはお金を奪おうとするスッキと藤原伯爵、自由を手に入れようとする秀子、はじめはそれぞれが自分のためだけに人を欺いた。しかし接していくうちにスッキと秀子の目的が変わる。スッキは秀子の自由のために、共謀していた藤原伯爵を裏切る。さらに、秀子もまた藤原伯爵の陰謀からスッキを救い「二人で」自由になるためにすべてを投げ出して伯爵を裏切る。この映画は日本人の役も韓国人の役者が日本語で演じている。また、スッキと秀子は女性同士であり、他の映画とは違う面白さがある。



(2) 音楽に表れた「ワル」

・「エキセントリック」(2017)／樗坂46

「誰もが風見鶏みたいに風の向き次第で あっちこっちへとコロコロ変わる(中略)だから僕は一人で 心閉ざして交わらないんだ」「人の目気にしない 愛なんて縁を切るはみ出してしまおう 自由なんてそんなもの」などの歌詞から、人に合わせて声の大きいだけの「普通」になるくらいなら人を信じずに一人で自分らしくいるという強い意志を感じる。ひとりで人と違うことをする人は「協調性がない」「変わり者だ」と思われるが、自分を殺してまで人に合わせる必要はない。また、曲中では秘密を守らない人や元のネタや真偽が分からない噂の拡散を問題にしている。曲の主人公は人に合わせてばかりの人たちの無意識の悪意に加担しないという意味で人と合わせないと言っているのだと考える。

・「Shake it off」(2014)／Taylor Swift

「歌いたい人は歌い続けて 妬む人はずっと妬むし 私はただ踊りまくるし そんなのはどうでもいいこと(気にしてられない)」とある。テイラーは恋人ができては破局を繰り返していた。そのたびに「浮気性」などの様々なうわさをたてられてはアンチにバッシングされていた。テイラーも樗坂46の「エキセントリック」の歌詞にあるように噂を脚色されたり、捻じ曲げられたりされていたのだ。それに対して彼女は「周りが自分のことをどう思っているか気になってしまうけど、人は変えられないからこそ、そんな噂まで楽しんで気にしないことが大切だと思う」と、この歌詞を書いたのである。

(3) 写真に表れた「ワル」

〈マイラ・ヒンドリー〉イギリスの連続快楽殺人犯で恋人のイアン・ブレディと共謀していた。遺体が発見されているにもかかわらず、無罪を主張していた。



(4) ファッションに表れた「ワル」

私が考えた「ワル」をファッションの観点から見ていく。

・革ジャン・ジーンズ



これは1953年に公開された『乱暴者』という暴走族を題材として取り扱った初めてのアメリカ映画の写真だ。反抗的な若者を演じたマローン・ブランドが着ている革ジャンとジーンズ、そしてオートバイにまたがる写真を見た世界中の若者が、そのスタイルを真似るようになる。この頃の不良と呼ばれる人たちは、戦争から帰ってきた帰還兵たちであることが多かったそうだ。若者はそんな帰還兵たちの荒っぽい命をかけて

戦って生きて帰ってきた男たちに「かっこいい」と感じたのだと考える。また、マローン・ブランド自身もアカデミー主演男優賞に選ばれたにもかかわらず、アメリカ映画界の人種差別への抗議を理由に受賞拒否をするなど破天荒な人物だった。幼少期から人種差別に対して否定的であり、自分の立場が悪くなったとしても差別に加担するようなことはしなかった。革ジャンやオートバイは不良のイメージが強く、当時の親の世代からは良く思われてはいなかった。しかし若者たちは憧れを持ち、流行のスタイルとなったのである。

- ・傾奇者（かぶきもの）
- ・「大鳥逸平 片岡十蔵」（1863・落合芳幾）

戦国時代末期から江戸時代初期に江戸や京都などの都市部で流行した。異風を好み、派手な身なりをして、常識を逸脱した行動に走る者たちのことを傾奇者と言う。

当時の男性には浅葱色や紺という色合いが好まれていたが、傾奇者は色鮮やかな女性者の着物をマントのように使ったり、袴に動物の皮をもちいてみたり、派手な扮装を好んでいた。素行はあまりよくなく、集団をつくって飲食代を踏み倒す、因縁をふっかける、または金品を奪うなどの所業を働いていた。しかし仲間意識を重要視し、団結と信頼のもとに、生命をも潔く捨てる生き方を美学としている面もある。

戦国武将の織田信長は家柄がよかったにもかかわらず髷を結わず、帯も巻かないというような斬新なファッションをしていて親戚や周りの人からは変わり者として扱われていた。

江戸時代前期に江戸の傾奇者を束ねていた大鳥逸平は武家に対抗していたため幕府に捕まってしまうが、取り調べの際に拷問をされても仲間内のことは一言も言わなかったとされて今のヤクザのルーツともいわれている。周りからは変わり者とされていたが、このように今も語り継がれているということはその時代にも彼らのことを「かっこいい」と感じた人が少なからずいるということだと思う。

- ・戦後の日本・スカジャン

太平洋戦争敗戦からの連合国軍の占領時代（1945～1952）に生まれたもので名前の由来は米軍基地があった横須賀から来ている。英語ではお土産ジャケットという意味の「スー



ベニージャケット (Souvenir jacket)」と呼ばれていた。日本に滞在した記念品としてや祖国の家族や恋人へのお土産として日本駐留のアメリカ軍兵士から人気だった。1961年に公開された『豚と軍艦』で主人公が着用し一躍有名となった。

この時代は軍基地や港がある地域は他国の文化がたくさん入ってきている。山田清機『不器用な人生』の第5話「久里浜病院のつばいひと」にもでてきた荒井さんは外から入ってきた珍しいもの、周りの人とは違うものを身に着けていた。219ページで荒井さんは「僕がやっていたのは、反骨とかそういうことではないんだ。(中略)ただ単にいい人じゃなくて、この一線は譲れないって、意地を張る部分を持っていないてはならない。」と言っている。大きな理由や夢ではなく、ただ「映画のヒーローみたいにかっこよくなりたい」という気持ちでも、ぶれることなく貫き通すことで意味合いが変わってくるのだと思った。



(5) 考察

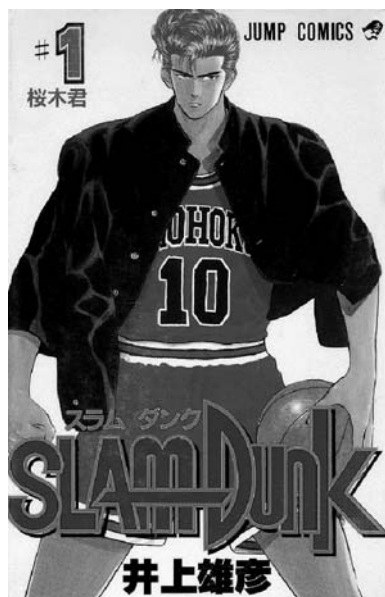
今まで「ワル」を調べてきて考えた私が思う「ワル」は、ただ単に非行や犯罪をする人のことを言うのではなく、自分の信念を貫くために手段を選ばないようなこと、自由であること、そしてそれを「変わっている」ではなく「かっこいい」と周りに思わせることを「ワル」というと思う。『ぼくらの七日間戦争』の中学生はこどもらしい自由な発想でのびのびと戦う。『お嬢さん』のスッキと秀子は自由のために行動をしており、映画自体も人種にとらわれないキャスティングや性別にもとらわれない内容だ。樺坂46の「エキセントリック」とテイラー・スウィフトの「Shake it off」は不自由を訴え、自分の意志で自由に生きるという選択をしている。写真で紹介したマイラ・ヒンドリーは快楽殺人犯であるためワルではないと思った。

5-5. 日本の不良とアメリカのワル

(人間科学部2回生 荒川亜門)

(1) 私が今まで考えていた「ワル」は、井上雄彦『SLAM DUNK』(1990-96, テレビ93-96)の桜木花道のような、言葉遣いが荒く粗暴な性格だが、どこか憎めないキャラクターといった人物像を想像していた。ワルとひとことで言っても様々な種類があると思う。ワルは悪ではない。悪に含まれるワルもいるがイコールではない。日本の昭和から平成前期のワルのステレオタイプは上記のようなものだったかもしれないが、現代のワルも、時代に合わせて多様化してきている。

昔のワルと聞くと、リーゼントで学ラン、たばこ、暴走族、といったような属性を思い浮かべる。前述した桜木花道もおおよそこのようなビジュアルをしている。この漫画の連載が始まったのが1990年で平成2年。あらすじとしては不良少年がバスケットボール初心



者から、持ち前の身体能力を活かして心身ともに成長していく、といった物語になっている。不良少年が主人公のスポーツ根性漫画、いわゆるスポ根ものとしては不動の人気を誇る。当時の人々の不良への憧れや、スポーツを頑張っている学生への感動、魅力的なキャラクター達が人気の理由であると考えられる。主人公以外にも、チームメイトや主人公の友人、他校のライバルたちにも不良のようなキャラクターがたくさん登場する。チームメイトの中には中学時代に天才シューターとして活躍していたものの、怪我から挫折し、自暴自棄になって一時期不良になっていた過去を持つ選手もいる。彼は更生して再びバスケットボールを始めることになる。私が一番好きなものこの選手で、やはりカッコいいと思う。この時代の不良は憧れの存在だった。

(2) しかし現代の不良は世間のとらえ方が180度違う。不良がモテる時代は終わり、冷ややかな目で見られるようになった。今では憧れの存在ではなくなり、もはやカッコ悪いとすら思われる存在となった。そもそも不良が生まれる背景には社会への不満や大人への反抗があった。それが今は家庭内などでの話し合いによって解決することが多くなってきたため、不良は減少傾向にあるようだ。それに、元不良という経歴も反感を持たれやすくなっている。SNSの発達によって、過去の出来事も調べようと思えば調べられるようになったことも大きいかもしれない。就職活動中にSNSのアカウントを調べられるといったこともあるようなので、若者はいわゆる「ヤンチャ」を控えるようになっていった。

とはいえ今でも不良をテーマにしたドラマや映画、漫画は若者から支持を受けて続けている。すでに我々の世代では「ワル」は創作の中のものとして認識され始めている。今の時代ではワルはあまり見られなくなった。昔の不良はワルでありながらどこかさわやかだった。だが、今よく描かれる創作の世界でのワルは悪に寄ってきているように思う。不倫や汚職、ハラスメント、不正。現代のワルの物語の舞台は大人たちが主役の作品が増えてきた。少し前に大人気だった『半沢直樹』(2013)などはまだ記憶に新しい。最近人気の作品も、主人公の成長物語やスポ根ものよりも、大人たちの勧善懲悪の物語が多い。時代に合わせて人々が求める物語のニーズも変わってくる。現代社会にはびこる悪が打ち倒されるのが見たい、というのが今の民衆の気持ちなのかもしれない。

(3) 一方で、海外では日本よりもダークヒーローを主題にした作品が多い。『バッドマン』(1989)や『デッドプール』(2016)をはじめとしたアメコミのヒーローや、『バッドボーイズ』(1995)や『ダイ・ハード』(1988)といった悪を討つワルを主人公とした映画

は見えて爽快だ。日本の作品とはまた違った種類のワルの要素を多く備えているのがハリウッド映画の世界だと思う。銃社会のアメリカでは日本にはない銃撃戦やカーチェイスなどが多く描かれる。そしてマフィアやカジノといった独自のものを背景としたストーリーも特徴の一つだ。他にも『天使にラブソングを』（1992）のように、無宗教国家とも言われるわが国ではあまり見られない修道院や教会などもよく舞台になる。日本にはない独自の文化を遂げていると言えるだろう。

とくにアメリカではスポーツにおいてもワルの特徴が見られる。日本ではラフプレーは忌避されがちだがアメリカではそれによって人気が出る場合もある。前述した桜木花道のモデルとなったプロバスケットボール選手がいる。マイケル・ジョーダンが所属していたシカゴ・ブルズのデニス・ロッドマンである。1980年代から1990年代にかけて活躍した選手で、当時でも有数のリバウンダーだった。彼は髪を派手な色に染め、全身にタトゥーを彫り込み、度々訴えられるような問題も起こしてきた。バスケットボールを本格的に始めるまでは、万引きやホームレス生活など、NBAプレイヤーになる人物とは思えないような生活を送っていた。その後、大学に入り徐々に注目され始め、やがてプロ入りすることになる。シカゴ・ブルズに入るまでにいたチームは乱暴なディフェンスが有名で「バッドボーイズ」と呼ばれ、勝つためになんでもする、やり方が汚いと言われ他チームからも嫌われていた。そして、また別のチームを経由した後ブルズへ入団し、ジョーダンらとプレーすることになる。難解な戦術を軽々と理解する頭の良さの一方で、試合中エキサイトするとチームメイトになだめられたり、乱闘になりそうな場面では抑えられたり、さらには味方ごと巻き込んで大暴れすることすらあった。



このような血気盛んな性格ながら、チームのためには地味な仕事に徹するなど、バスケットボールに対しては非常に真摯な一面もあった。ロッドマン自身はその性格に反して全く得点に執着せず、ディフェンスやリバウンドに徹する縁の下力持ちといったプレイスタイルだった。チームのシュート練習中も、自らはシュートを打たず、チームメイトが放ったシュートがどこに飛ぶのかをずっと観察していたという逸話もある。短気で粗暴、破天荒だが自分の仕事は堅実にこなす。まさにワルのステレオタイプともいえる選手だろう。

(4) ワルは時代に合わせて移り変わっていく。以前は不良こそがワルとも言ってきたかもしれない。しかし、現代になるにつれ、不良は減っていき、あこがれの対象となることはなくなった。日本では、徐々にビジネスを舞台にした勧善懲悪ものが流行り始め、不良が主人公となることは少なくなっていった。一方で、海外、特にアメリカではアメコミをはじめとしたダークヒーローが主役の創作作品が多く作られ人気を博している。アメ

コミだけでなく、コメディ・アクション映画で、ワルの主人公が大暴れするような、爽快な映画がよく大ヒットする。独特の舞台設定で、日本にはない面白さがある。バスケットボールに限らず、スポーツ界にはまさにワルと呼ばれるようなプレースタイルで人気を集める選手が多くいる。創作の中ではない、リアルなワルを見られる数少ない場かもしれない。

昔に比べると減ってしまったかもしれないワルという概念。しかし、その時代によって形を変えながら、創作の中やスポーツなどで、たくさんの人々の憧れの存在であり続けている。これから先も少しずつ変わっていきながらも、大衆から憧憬の念を抱かれ続けてほしい。

参考文献

ウィキペディア；SLAM DUNK

https://ja.wikipedia.org/wiki/SLAM_DUNK

ウィキペディア：デニス・ロッドマン

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%83%8B%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%AD%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%9E%E3%83%B3>

画像引用

<https://itplanning.co.jp/works/slamdunk>

<https://www.rollingstone.com/culture/culture-features/dennis-rodman-tattoo-tshirt-untold-history-bulls-basketball-990275/>

5-6. 特殊なワルについて

(経営学部4回生 谷崎 樹)

(1) ここで取り上げる理由

皆さんは、「ワル」といえば、不良や悪役が思い浮かぶと思う。今回は、特殊な「ワル」について紹介していきたい。私がなぜこのテーマを選んだのかというと、この「ワル」について、どのような分類に入るのかを研究していきたくかったからだ。今回は、『少年ジャンプ』の著者 松井優作『暗殺教室』(2016)の登場キャラクター「殺せんせー」について取り上げたい。まず、『暗殺教室』のあらすじから説明していく。

(2) 『暗殺教室』のあらすじについて

進学校の「椚が丘中学校」のE組の担任を受け持つようになった変な怪人生物。彼は、「1年後に私が地球を滅ぼします。なので、それまで私を殺してください。」とE組生徒達に依頼する。しかし、その変な怪人生物はマッハ20



で動きが速すぎる特徴を持っているため、誰も殺すことが出来ない。それは10年来の殺し屋やマフィア達も出来ない。そして、日本政府が打開案として提案したのが、賞金報酬100億円用意するという事だった。

怪人生物が生徒達にどういう事を教えたのかというと、学校の主要科目5教科だけでなく、勉強の効率的なやり方や手法であった。学校を卒業した後、社会人になった時に生き抜くための手法など様々なことを教えていくストーリーである。今回は、殺せんせーは、どういうワルなのかを研究していきたい。

(3) 「殺せんせー」は、どういうワルなのか？

今回取り上げた「殺せんせー」は、見た目としてカッコいいやかわいいにも属さない。そして、ワイルドやクールでもない。見れば分かるが、顔の表情などを見ても至ってシンプルであることが分かる。対立か協調かで言えば、協調である。なぜなら、生徒達に狙われながらも授業はしっかり教えて、生徒達の事を考えているからである。そして、学園系スパルタの漫画（『GTO』1997年や『ごくせん』2000年）などもあるが、この系の漫画は、スパルタ教師と生徒達の物語である。しかしこの暗殺教室は、生徒たちの自主性を重視したことや強制ではなく、生徒達が自ら動く事を強調した漫画である事が分かる。結論として、キャラクターがなぜ丸いにこやかな顔である事が分かる。

画像引用

<https://www.amazon.co.jp/%E6%98%A0%E7%94%BB-%E6%9A%97%E6%AE%BA%E6%95%99%E5%AE%A4-DVD-%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%B6%BC%E4%BB%8B/dp/B00YEQD20G>

参考文献

「暗殺教室」(2016),『少年ジャンプ』(週刊誌)

「ワル」の図式

(作成：人間科学部2年生 荒川亜門)

